

## 刊 行 の 辞



富山県神道青年会  
会長 高倉 政憲

今年平成十四年壬午は、当富山県神道青年会が全国に先駆け  
て昭和二十二年に創建してより五十五周年、また昭和四十二年  
に再建発会してから数へて三十五周年の節目の年にあたりま  
す。

この機会に、これまで先輩諸賢が辿ってこられた足跡を振り  
返って、その業績を称へると共に、伝統ある当会に連綿と流れ  
る基本精神を再認識して今後の道標とすべく、本書「会報集」  
を刊行し、記念事業の一つといたしました。

再建後、復刊された会報「可加美」が丁度三十号となること  
もあり、散逸しがちであった「可加美」のバックナンバーを纏  
められないものかと考へ、担当副会長と広報委員長が中心とな  
り、事務局の備品はもとより県内全社家にわたって搜索の手を  
伸ばした結果、幸ひにもこれまでの「可加美」を全て揃へる事  
ができました。

特に、昭和二十三年発刊の創刊号から第四号までの「可加

美」を発見できた事は、この上ない幸運でありました。戦後の  
混乱期に、高き志と気概とをもって神社神道の復興に毅然たる  
態度で立ち向かはれた諸先輩のお姿を、紙面を通してありあり  
とうかがふことができ、我々現役会員はこの心を心として受け  
継ぎ、今後の活動の指針としなければならぬと改めて痛感し  
た次第です。

また特別企画として、再建以後の歴代会長にご参集いただき  
座談会を開催いたしました。

現役当時の思ひ出や苦勞話を熱く語り合っていたいただきなが  
ら、現在の若い会員に対して叱咤激励を頂戴しました。この模  
様は特別記事として、本書の目玉となっておりますので是非と  
も熟読していただきたいと存じます。

神社界を取り巻く環境がますます厳しさを増してゐると言は  
れる今の時代に、この「会報集」が富山県神道青年会活動の単  
なる記録集に終はるのではなく、青年神職のみならず多くの先  
輩方の心に何か火を灯して、斯道発展の一助となるやう念願い  
たすものであります。

最後に、本書の刊行にあたり温かいご理解とご協力を賜りま  
した吉川正文先生を始め歴代会長の皆様、また関係各位に深く  
感謝申し上げ、刊行の辞といたします。

平成十四年七月

# 目次

刊行の辞（富山県神道青年会 会長 高倉政憲）  
特別企画・歴代会長座談会……………一頁

## 創建時・可加美

創刊号（昭和二十三年十一月七日）……………二六頁  
第二号（昭和二十四年七月一日）……………四二頁  
第三号（昭和二十五年八月六日）……………七六頁  
第四号（昭和二十六年二月十日）……………一〇三頁  
再建後・可加美

復刊号（昭和四十六年十月十五日）……………一〇八頁  
第二号（昭和四十七年四月三十日）……………一一六頁  
第三号（昭和四十八年四月三十日）……………一二四頁  
第四号（昭和四十八年十一月三十日）……………一三二頁  
第五号（昭和四十九年十一月三十日）……………一四〇頁  
第六号（昭和五十年十二月八日）……………一四八頁  
第七号（昭和五十二年十月二十五日）……………一五四頁  
第八号（昭和五十四年十月一日）……………一六〇頁  
第九号（昭和五十五年十月一日）……………一六八頁  
第十号（昭和五十七年三月一日）……………一七六頁  
第十一号（昭和五十八年三月一日）……………一九二頁

第十二号（昭和五十八年十月一日）……………二〇〇頁  
第十三号（昭和五十九年十一月二十五日）……………二二〇頁  
第十四号（昭和六十一年三月十五日）……………二三〇頁  
第十五号（昭和六十二年三月十五日）……………二四二頁  
第十六号（昭和六十三年三月三十一日）……………二五四頁  
第十七号（平成元年三月三十一日）……………二七六頁  
第十八号（平成二年三月三十一日）……………二八八頁  
第十九号（平成三年三月三十一日）……………三〇〇頁  
第二十号（平成四年三月三十一日）……………三一二頁  
第二十一号（平成五年）……………三二四頁  
第二十二号（平成六年五月一日）……………三三六頁  
第二十三号（平成七年五月一日）……………三四八頁  
第二十四号（平成八年五月一日）……………三六〇頁  
第二十五号（平成九年五月一日）……………三七二頁  
創建五十周年・再建三十周年  
記念誌「可加美」（平成九年十一月二十五日）……………三八四頁  
第二十六号（平成十年六月一日）……………四二〇頁  
第二十七号（平成十一年五月二十日）……………四三二頁  
第二十八号（平成十二年五月一日）……………四四四頁  
第二十九号（平成十三年六月一日）……………四五六頁  
第三十号（平成十四年六月十五日）……………四七二頁

編集後記……………四八五頁

# 創建五十五周年・再建三十五周年 特別企画・歴代会長座談会

日時 平成十四年三月二十七日水曜日  
午後六時より午後七時三十分まで  
場所 富山第一ホテル  
懇親会 松川(富山第一ホテル内)



## 出席者

歴代会長  
(再建初代) 鈴木 瑞治  
(第二代) 田代 昭夫  
(第四代) 尾崎 定輝  
(第五代) 榎野 守雄  
(第六代) 林 芳光  
(第七代) 齋藤 直己  
(第八代) 二宮 啓  
(第九代) 平尾 旨明  
(第十一代) 平尾 晃  
(第十二代) 武田 邦浩  
(第十三代) 河合 正登

## 会員

(会長) 高倉 政憲  
(副会長) 原 嘉伸  
(副会長) 船木 信孝  
(監事) 藤井 秀嗣  
(監事) 上田 正宙  
(相談役) 横越 照正  
(理事) 桜井都嘉佐  
(事務局長) 平尾 賢  
(広報委員長) 轡田 雅彦  
(広報委員次長) 尾崎 定重

※資料として「神青協五十周年史」掲載の当会活動記録の複写を配布。  
※できるだけざり発言を忠実に収録しましたが、文脈上の都合にて編集した部分があります。また、郷土の特色である富山弁による表現は極力残しました。

(高倉政憲) それではお待ちを致しました、本日は諸先輩方、歴代会長様方には座談会を催すといふことでお知らせを致しましたところ、皆さんお揃ひでご出席いただきまして本当にありがとうございます。  
今年平成十四年は、当会の再建三十五周年創建五十五周年を迎える年になります。そこでこれまでの歴史を振り返る意味で、今まで刊行して参りました会報「可加美」全ての物を一冊の冊子にまとめる事を、記念事業として行ひたいと考えてをります。今後我々現役会員が益々邁進して行くために、歴代会長の皆様方からの力強い叱咤激励をいただくと共に、現役当時の思ひ出などを熱く語って頂き、本日の座談会の模様を会報集の特別記事として収録させていただきたいと考えてをります。ひとつ、中身

の濃いお話しを賜りたいと存じます。不慣れでございますが現会長として本日は進行役を務めさせていただきます。短い時間ですがこの場をただいまより七時半までの一時間三十分と限らせていただきますので、どうぞ宜しくお願ひいたします。  
本会は創建が昭和二十二年といふことでございますが、その後暫くの活動停滞期間があり、昭和四十二年に活動を再建といふことになってをります。その再建なさいまして先づ初代会長をお務めになられました鈴木宮司様からご順に、現役当時の一番印象に残ってられる思ひ出や、特に再建の時のご苦労などございましたら、お話しいただけますと存じます。宜しくお願ひいたします。

(鈴木瑞治) 再建の初代会長といふことで大変高い席に座らせていただいております。先ほどお話しになりましたやうに再建三十五年、三昔半も経ちますと昔の記憶も定かではなくなりまして(笑)、ここに再建十周年記念誌を前にして、見ながらお話し申し上げたいと思ひます。昭和四十二年七月だったと思ひますが、魚津神社に十数名参集いたしましたして再建しようといふことにな



りました。その席でみなさんとても熱心に話していただいたのですが、その時先輩だった今の神社庁の参事さんのお父さん(近尾昌孝氏)や九里毅一さん、高松正治さん、横越昭二さん、かういふ先輩の激励指導のもと、心ある者皆を集め活動を開始したわけでありまして。それで先づ会長を決めなければいけないといふことで、初代の会長に、今の会長のお父さんにあたる、高倉恭憲宮司さんを皆で推挙したのですが、どうしてもと固辞されたので、その次ぎ「年の順番からいふとおまえの番だ」といふことで私もお引きはしたのでございますが、たうたうお引き受けすることになりました。その上、四十六年に隣の田代宮司さんに引き継ぐまで二期、四年もの長い間務めさせていただきました。私のやうな者が、その間重責を担ってゐたことを今振り返ってみて、皆に本心に申し訳なかつたと思ふのでございます。

当初は一生懸命参加を呼びかけても、なかなか皆の理解が得られず、せいぜいで二十名程度での活動でございました。さういふ状態が続いてをりましたが、北陸地区の神道青年会研修会の当番県となった時、なんとかしなきゃいかんと個人的にお願ひし、五十名程動員いたしました。それを契機に少しづつ会員数が増えて参りましたが、長続きせず、また自身の魅力もないもんだから、再び減り始めてしまいました。そこで毎年ソフトボール大会、護國神社の河原にまましてね。(笑) また、護國神社をお借りして会合する、といふやうな事を繰り返してをりました。そしてそれでもどうにかうにか計画した行事は、少しづつこなしで参ることが出来たわけでございます。そのうち、ここ(※配布資料・当会の事業を年度別に記した物)にも書いてございますやうに禊錬成会、それから伊勢から雅楽の楽部の方々をお呼びして、助祭員の方々も加はっていただき、氷見を会場に雅楽の勉強会を行いました。さういった何かひとつでも魅力ある行事をとやってみようかとさせていただきます。当時は、尾崎宮司さんが事務局長で、大変熱心に会の運営に關はっていただきました。私は飾りみたいなもので皆

さんに助けられながら、どうか四年間務めさせていただきました。加へて、神道青年全国協議会(以下・神青協)の監事が廻って参りましてそれも受けいたしました。今でも、神青協の聖寿会といふOB会を持つてをりまして、年に一回づつ集まっております。去年は富士山の麓でやったんですが、今年は四国の松山でやる予定です。今もその当時の役員の人達とのつき合ひがございまして大変話しやすい間柄でございます。さういふことで、昭和四十六年田代宮司さんにバトンをお渡しするまでのお話しを申し上げてをきたいと思ひます。

(高倉) ありがたうございます。やはり暫く活動をしてをられなかったこともあつて会員を集めたり活動を軌道に乗せるまで、色々なご苦労があつたことがうかがへました。続いて鈴木会長さんからバトンを受けられ第二代会長をお務めになつた田代宮司さん、お願ひいたします。

(田代昭夫) 私、神青協の二十年誌といふ本を持つてきました。これにたまたま私が富山県神道青年会の動きを寄稿したものが載つてゐる訳なんです。(二十年誌をめく

た、といふわけです。鈴木会長さんも色々ご努力されてをられました。またそれと同時に当時、林耕之庁長さんに代はられ、「神青会の活動をしっかりとさせたいんだ」といふご方針から、私どもの禊や講演会などの活動或いは行事に積極的に参加されてをられ、また佐伯幸長先生といった方々のご指導を受けたことも覚えてをります。

私が会長時代に思ひ出に残る事は禊錬成会と会報です。会報について申し上げますと昭和四十六年の事でありますが、隣にをられる梅野さんから「なんか、会報が欲しい、可加美の復刊第一号、これを是非やりたい」といふ提言があり、そこで吉川正文先生から昭和二十年代の活動ぶりのお話しを聞いたり、私も神社庁に行つて色々古い資料等を探しまして、やうやく復刊号を発刊するに到つたわけです。先日、神青会から「古い可加美はないですか」といふ問ひ合はせを受けた時、私もそれと同じやうなことを昭和四十二、三年頃やつてをりまして、当時の古い資料が今、どうなつてあるのかわかりませんが、神社庁では例へば木船さんや黒田さん、或いは吉川さん、さういった大先生の先輩方のガリ版刷りの物を読んだのを思ひ出しました。

私、個人的には鈴木さん、尾崎さん、亡くなられた氷見さん、そして隣の梅野さん、さういった方々と一緒に神青会の活動ができたことは本心に心の拠り所であり、今日の私の神明奉仕に非常に大きく役だつてゐます。神青会卒業の昭和四十八年には伊勢神宮の第六十回の式年遷宮がございまして、去るに当たつてのひとつの土産として、尾崎定輝さんと二人一緒にご奉仕させていただきました。それこそ神青会の活動のお蔭で神社庁から推薦され叶つた事かと今思つて感謝してゐます。

(高倉) ありがたうございました。神宮式年遷宮をはじめ「可加美」の復刊、禊錬成会など素晴らしい行動力で活動されたやうで我々現役会員も見習ふべき点が多いのではないかと思ひます。

田代宮司さんの後、第三代会長さんとして氷見宮司さんがバトンタッチを受けられたわけでございますが、ご承知の通り既に帰幽されてゐます。我々も親しく教へを請ふことが出来ればと思つてゐたのですが、非常に残念であります。

その後続いて第四代会長をお務めになられました尾崎宮司さんの時代には、再建



りながら)私が高校教員を辞め神社界に入り、宮司を拜命した昭和三十八年、神社庁へ宮司就任の申請書を持参した折、当時の尾崎定業庁長さんか

ら「これからは、あんたみたいな若い人ががんばつてもらわなあかん」と、近尾昌孝主事さんからは「神青協といふものがあるから、一度東京に行つて雰囲気見てこい」と言はれ、続けて二回東京へ行きました。当時の私は、地元の魚津では高倉恭憲さん以外、若い人を全く知りませんでした。また、五社会関係の青年部、隣にをられる尾崎定輝さんは、「別表五社だけでも横の連絡を持ちたい」といふ気持ちを持つてをりました。そして、昭和四十二年の七月たまたま魚津で総会といふことで同志が寄つて、氷見からわざわざ大先輩の鈴木さんがおいでになり、先ほどのお話しをやうに鈴木さんに初代会長をお願ひし、再建発会し

十周年といふ大きな事業をなさいました。そのあたりのご苦労などを、第三代氷見会長さんの思ひ出話などを交へて、尾崎宮司さんの方からお願ひいたします。

(尾崎定輝) 私が大学を卒業して日枝神社へ奉職いたしましたのが昭和四十二年でございます。勿論私は神道科の卒業でないものですから神社界のことは少しもわかりませんでした。神青会との関はりについては、当時、別表神社・五社会があり、それに若い人たちも加へて、「五社、別表神社の青年部」を作つたらどうだらうかといふことで、四十二年の六月に発会式をやりました。さうしましたらある先輩の方が「五社の労働組合を作るつもりか」と言はれまして(笑) ガツクリきてしまひまして、どうしたら良いもんかと思ひあぐねてをつたところ、たまたま魚津の方から声が掛かり「神



の青年部」を作つたらどうだらうかといふことで、四十二年の六月に発会式をやりました。さうしましたらある先輩の方が「五社の労働組合を作るつもりか」と言はれまして(笑) ガツクリきてしまひまして、どうしたら良いもんかと思ひあぐねてをつたところ、たまたま魚津の方から声が掛かり「神

道青年会を発会したいんだがどうだらうか？」といふお話がありました。「これは、もっけの幸ひ」と思ひまして、別表神社の青年部をやめて、こちらの方に全面的に協力しようとする、神道青年会の発会式に出席させていただいたわけでございます。

そしてその翌年、昭和四十三年に神社庁で第二回目の総会といふことになりませうか、三月に行はれまして鈴木先輩が会長に就任されたわけであります。当時私が一番若かったものですから、日枝神社に奉職してゐたといふ地の利もあつたと思ひますけれど、「おまえ事務局やれ」と仰せつかりましてそれから多分、氷見会長さんが就任されるまで事務局をやつてゐたのではないかと、また氷見会長さんの時に副会長になつたと記憶してをります。氷見さんと二人で努力しながら二人の先輩が築き上げてこられたものを一生懸命守らうといふことで、家も近かつたことから、よく氷見さんの家へ遊びに行つたり、今後どうしたら良いであらうか、色々考へたりもして、仲良くしていただいてをつたわけです。かうやつて（配布された資料の）記録を見ますと当時からやつてきた事が今でも続けられてをり、非常にありがたい感謝してをるわけであり

ひ、「せめて私らがやつてきたこの十年間を記録に留めておきたい」といふ思ひで再建十周年記念誌を作らせていただきました。当時としては大変高く、確か七、八十万円ほど掛かつたかと記憶してをりますが、そのお金集めにも苦労しましたが、皆さん快く出していただいた事は大変ありがたいなあと思つてをります。当初、私の家に十冊程ありましたが、後輩たちにそれぞれあげたりして、結局はこれ一冊しか残りませんでした。ことあるごとにかういふ記録を残しておくといふことは必要なことだと思ひます。

また、当時私の神社で、同級生やその下の人たちで「瑞垣会」といふ氏子青年会を発足したのですが、皆段々と歳を取つてきて、現在は次世代の時代になつてゐますが、会としては世代交代が進まず、親は出てきても子供は出て来ないといふ状況で、活動していただいてゐるのは五十代、六十代といふことになってきました。名簿には若い人の名前が挙がつてゐるのですが、なかなか出て来ていただけません。そこで今後、神道青年会の活動の主眼のひとつとして、是非、氏子青年の育成といふことにも力を入れてお願ひをしたいと思います。やがて

ます。特に「神楽笛研修会」と書いてありますが、始めは確か神楽笛をお互ひに練習してお宮の祭典の時に神楽笛を吹いたら良いがではなからうか、と考へてをりました。が、それよりも雅楽を勉強して、笛の音を掴んだらどうかといふことで神楽笛研修会といふ名目ではありましたが、雅楽の勉強もしてをりました。私はたうたうものにはなりませんでしたが、今にかうやつて伝へられ、皆さんが立派に雅楽演奏をしてをられる処を拝聴いたしますと本当に嬉しく思ふわけであります。それから、また、写生大会の第一回をそのころにやつたんだなあ、今初めて気が付きました。

会長をさせていただいたのが、昭和五十二年から五十四年といふことであります。年齢から考へれば三十二、三から三十四、五歳迄の間といふことになりませうか、それでバトンタッチしてからは、あまり出る機会が無くなつたもんですから、なんか五、六年を残して神青を卒業したやうな感じで、実質十年間の活動であつたかなと思ひます。しかしながら大変充実した、活動であつたと思ひます。二人の先輩の話には出ませんでしたけれども、一番苦労したのが「日の丸パレード」であつたかと思ひます。き

もう七、八年もすれば、富山県で氏青（氏子青年会）の全国大会を開かなければならぬやうな時期が来るんではないかと思ひます。その時に泥縄式に単位会を作つてもその時限りになつてしまいますから、地道な活動を加へていつて、氏子青年会といふものを富山県連として根付いた組織が出来やうな会に育てていつていただきたいと思つてをるわけでございます。私の処の氏子青年会も十年ごとに記録誌を出してをります。今年で二十五年になるわけですから、やはりさういふ記録をまとめるといふことが非常に大事なことであるかと思つてをります。私にとりましてはこの十年間の神道青年会の活動は神職としての青春時代であつたと思つてをります。以上です。

（高倉）ありがとうございました。我々の今の会報集編集にあたり、再建十周年記念誌は非常に参考にさせていただいてをります。見てをりますと色々な活動についてもこの頃に基礎を作つていただき、現在も我々が引き継いでゐるといふことがよくわかります。

ただいま、我々の今後の課題といふことで氏子青年の育成といふことについてお言

っかけは、建国記念の日に国旗を揚げるやうにと、当時日枝神社に広報車がありましたので、テープを流しながら富山市内を広報して廻つたわけです。祝日で多忙な日とあつて会員を富山に集めることは、困難でした。最初は四、五台程で走つてをったのがその内徐々に減り、梅野さんと雪の中、その広報車を運転し、車がガタンガタンになりながら廻つたことを覚えてをります。さういふ現状から、冬場はやめて天皇誕生日の四月二十九日にしたらどうかとか、そのうちそれも出来なくなり、じゃあテレビスポットを使って「国旗を揚げませう」と訴へたらどうか、といふことなども検討したわけですけども、テレビスポットはお金が掛かつて一回きりでやめたのではなかつたかと思ひます。そのほかに一番印象に残るのは「富山神青のあゆみ」といふ再建十周年の記念誌を作成したことでありませう。今回、創刊号からの「可加美」を一生懸命集めてをられるといふことでありますけども、私らの時も、先に、田代先輩がおつしやられたやうに過去の記録といふものがほとんど散逸してしまつて揃へるのが大変でした。資料がたぶん会長交代で事務局が移るたびに散逸していつたがではないかと思

葉をいただきました。やはり外に向けての教化といふことは勿論我々神道青年会に限らず、青年会から離れても大きな課題であると思ひますので、これからも我々は心して氏子青年の教化といふことに向けて進んでゆかなければならないと感じました。

尾崎宮司さんの後、第五代会長として梅野宮司さんがバトンを受けられました。昭和五十四年に会長になられましたから昭和六十年まで六年間、会長としてご活躍をなさいました。たくさんのお思ひ出、ご苦労など有られますでせうが印象に残つてをられる事と、我々現役メンバーに對しまして激励、叱咤していただくやうなことがございましたらそのあたりも交へてお話しを宜しくお願ひいたします。

（梅野守雄）かうやつてたまに、鈴木先輩、田代先輩、尾崎さん、かういふメンバーと会ふと、当時が彷彿として蘇つてくるやうですね。私が富山縣護國神社に奉職したのが昭和四十三年の三月二十日です。また、四十歳になるまで神道青年会と共に歩んだといふ事を自分でも誇りに思つてゐるし、今だに自分の血となり肉となつてゐるといふ風に思つてゐます。まあ、その当時はよ

く議論しましたね。(笑) こちらも血の気が多いもんだから、鈴木会長に「ああしたほうがいいんじゃないですか、かうしたほうがいいんじゃないですか」とかいふこと



で、いろんな提案をしたりしました。そして、私が一番最初に手がけたのが禊錬成会でした。当時、上市の二宮清雄さんが丁度帰って来てゐて、「禊錬成会を神道青年会で行ふのは、なかなか難しいだら

うから、こちらで先ず企画してみたらどうか」と、かういふことでやりました。この写真にも写ってますけど、(再建十周年記念誌「富山神青のあゆみ」を見ながら)あの時は、鈴木会長も田代会長も：

(田代昭夫) 若い顔しとるねえ。(笑)

(梅野守雄) いやあ、若かったですよ。

(鈴木瑞治) 自分ぢやないみたいだ。

(一同・笑)

(梅野守雄) それで、川がねえ、上市川なんですよ、ところが急流でね、とつても入れる雰囲気でないんです。それで、当時の平井町長にお願いして、なんとか川の縁にプールを作って貰おうと町長室へお願いに行つたんです。そしたら「あそこをるブルドーザー、使つて良いから、いひなさい」といふことでそのブルの運転手に、「今、町長に会つて許可貰つてきたんで、やつてくれ」といひましたら「そんなこと、俺は聞いとらん!」と。まあそんな問答もあり、結果プールを作つてもらつた。そして神度神社といふところを会場にしてやつたんです。でもお金がないでしょ。それで林耕之序長に掛け合つて、講師になつてもらふといふ事と、お金を出して貰ふといふ事の二つをお願いに行つたら「わかつた」と快諾を得て、講義は「佐々木宗一郎博士」の憲法論を論じて貰つた。そして私がこわくさい、ポール・リシャールの「黎明のアジア」をやつたんです。さういふ勉強会も含めた、禊錬成会をやつたんです。二泊三日ですよ、

はまだまだ沢山ありますがとりあへずさういふことで…。

(鈴木瑞治) 「スクール」(※富山青年会議所主催の合同研修会の事) はあんたん時だつたっけ？

(梅野守雄) 雄山の芦峠の大仙坊でスクールと一緒に、戸田義雄博士をお呼びして、研修会をやつたことがありますね。これも忘れがたいことですね。

(田代昭夫) 議論といふのはねえ、テーブルを叩いて、(実際にテーブルを叩く)するんですよ。こんなやつてねえ。

(一同・笑)

(高倉) ありがたうございました。若い、現役バリバリの姿が今でも彷彿とおうかがひできました。お話しにありましたか、今の若い者は諸先輩から見ると大人しくなつてゐるのかなあといふことで、まあ、飲むとさういふ訳でもないんですが、(笑) 酒の無い場ではちょっと大人しいのかもしれない。梅野宮司さんから昭和六十年に会

その当時は。(※注・現在、一泊二日)二宮清雄さんのお母さんにホントに胡麻と梅干しだけのお粥を作つて貰ひ、一日二食を守つてゐました。さういふ非常に充実した第一回の禊錬成でした。それが今日も続いてをと思ふのです。まあ、若気の至りです。いふぶん無茶なことをしたなあと思ひます。今だったらこんな二泊三日なんて、とてもぢやないけど取れない。あの時は暇だったのかなあと、今更思ひ出してゐます。

この「禊錬成会」が、鈴木先輩や田代先輩らの快いバックアップによつて、次につながる大きなきっかけ、或いは流れを作つていただきました。「お宮さんを描く写生大会」ですとか、「自然に親しむ子供の集ひ」これは尾崎会長の時だったですか。それから、先ほど「日の丸パレード」の話がありました、あれも年二回、よく続けたなあと、今更に思ひ出してをります。特別な事をしたんぢやなくて、神主の若い時を「神道青年会」といふ「場」を借りてエネルギーを発散させてもらったと、感謝いたしてをります。

「神道青年会」といふのはさういふ意味で「エネルギー発散の場」でもあるといふことです。神主としての修行といふ以上に

長職を引き受けられましたのが林芳光先輩でございます、思ひ起こせば、丁度、林先輩にバトンが渡されたときに私も富山に戻つて参りました。新入会員として緊張しながら総会の方に出席させていただいたことが今でも忘れられない事があります。林会長時代には色々、新しい試みをなさつてをられましたので、その辺のご苦労と、我々に対してのご注文などもございましたらお願いいたします。

(林 芳光) えー私で急に若返りまして、会長が。(笑)

(梅野守雄) 俺だつて若いわい。

(一同・笑)

(林 芳光) 失礼をいたしました。(笑) 偉大なる先輩方の後を引き継いだわけでありませう。資料を作つていただいて大変助かりました。会長就任は昭和六十年の三月の総会であります。私この時、三十二歳でしたので一番若い会長でございましたが、さういふこともありまして先輩方の温かいご指導をいただき、何とか二年間役務を務めさ

お互ひのコンセンサス(同意・賛同)を深めてゆく、といふことでも非常に良い会ではないかと思ひます。我々の時は、議論しましたよ、そりゃあもう沢山。皆さんの今の姿を見てゐるとずいぶん大人しく見えるくらい。飲んだ時なんか、もう(殴り合ひ)寸前まで行く勢ひがありましたよ。それもひとつの「先輩後輩」とのつながりの中で、「後輩」には慣れが、「先輩」には大きな包容力があつたからこそ出来たんだらうといふ風に思つて今でもこの会に感謝してゐます。さういふことで、この神道青年会といふのはどんな意味だらうと、やっぱり若い神主の切磋琢磨する場であるといふ事を考へれば素晴らしい会でありますからこれからも議論を尽くし、そしてお互ひに助け合つてやつて行かれることがこれ、大事なことでないかなあと思ひます。まあ、申し上げたいこと





分の代で行ったことであり、まずけれども、一番感銘したといひますが、感激いたしましたのが忘れもしない「献穀田」の事であります。当

時やっぱり「お米離れ」などといったことが非常に論議されつつたわけで、ある「一六会（いちろくかい）」（月一度の例会）の直会の席でも、そんな話になりました。『お米を大切に作る心、かういったことを若い神主が率先して回復させずしてどうなるんか』といふやうなことを話してをったんです。そしてそのなかで「この中で田圃に入ったことのある者、何人を知る？」と私が聞いたんです。さうしましたら一名をたか二名をたかだかだっと思ひます。「それぢやあひとつ、体験として米作りをやってみるか」といふやうなことから話が始まり、直会が進むうち「宮中に献穀しようぢやないか」と、大変有り難い話にまで

なり、最終的に「献穀田」といふ形になったわけです。それで当時副会長をされてをった、井口村の井頭宮司さんが丁度、「いやあ、家に田圃が一反五畝あるから、そこでやったらどうか」といふ話になって、トントン拍子でありました。あれは昭和六十一年の五月の下旬であったかと思ひます。普通ですと田植系には遅い時期で、周りを見廻しますとみんな田植系は終はっとりしましたが、きちっと厳肅にお祭りをしましてすね、そして「早乙女」ならぬ……うん、なんといひますか……えー……。

「むくつけき？」（誰かからの一言）

（一同・笑）

※「むくつけき」＝むさ苦しい

（林 芳光）…（笑）「益荒男」約十数名が田植系をしまして、無事に終へたといふこととであります。あと、草刈りとか草むしりとかありまして九月の二十五日に拔穂祭を行ったと。どちらも、快晴でありました。そして精米しまして、皆「宮中に献上するんだ！」「天皇様に捧げるんだ！」といふ気持ちですすね、黒盆に一粒一粒、箸で選

びまして、厳選した白米を白絹の袋を作り、尚且つ桐の箱に収めまして献上したと。それが非常に懐かしく感激でありました。丁度、昭和天皇様御即位六十年といふ事でしたから非常に良く覚えてをります。

それから先ほどの「一六会」については、当初、集まる日について「大体中旬、十六日ちや、どうけ？」と皆に計ったところ、たまたま誰も祭りが無く、それで毎月十六日にやらうぢやないかといふ事で始めたんでありますけれども、「なんでイチロクカイって名前付けたんだらう、もつと良い名前付けたら良かったんないかなあ」と今思ひますが、当時、これは二宮啓さんと話して、『いやあ、面白いがぢやないかかよ（面白いんぢやないの）』と、これまたすんなり決まったんですね。とにかく会員がもつと集まる機会を増やして、神社のことで、神道のことはもちろん、もつと色々な事を勉強していったら良いんぢやないかと、或いは懇親を深めたりすることも非常に大事ではないかといふことで始めたんであります。で、最初は会員持ち回りで、会員の自宅や社務所に集まって午後七時頃から始めとつたやうな状況であります。その当番の会員がその日の座長となる。そして

色々な事を…先ほどからおっしゃってゐるやうに議論から喧嘩になったこともありましたねえ、確か。本当に一年間欠かさず十六日に行ったといふことで今本当に懐かしく思ひ出すわけでございます。この二つが私の大きな思ひ出になってをります。神道青年会を通じてですねえ、色々な事を体験させていただき、今でもさういふことが心の支へになってゐると思ひます。

（高倉）今、おっしゃいました献穀田、私もお田植祭に祭員で奉仕させていたいただいたことを覚えてゐますし、その後の田植系、それはそれは広い田圃でありまして（笑）初めて私も実際に田圃に入つて手で植えたことは良い体験でありましたけれども、腰を痛めてしまったやうな思ひ出もございませう。宮中に御慶事がありました際には「献穀田」が恒例の行事となつてをりまして、平成十四年度も五十五周年の記念事業として、また先の内親王殿下御降誕のお祝ひといふ意味を兼ねまして本年五月にお田植祭を斎行致しました。そして九月には拔穂祭を斎行して、宮中、神宮、明治神宮、靖國神社、また県内の別表神社さまの方にもお初穂を御奉納させていただかうといふ風に

も考へてをりますので、その節には宜しくお願ひしたいと思ひます。

さて、林会長さんの後を継がれましたのが斎藤先輩でございまして、斎藤先輩の時には再建二十周年といふ大きな節目を迎へられました。そのあたりを交へまして斎藤先輩、お話しを宜しくお願ひいたします。

（斎藤直己）私が富山の方に帰つてきましたのが昭和五十六年で、丁度梅野会長が就任された年であります。当時は役員会と総会の参加人数が、かはらんやうな寂しい状況でありました。その中で、梅野会長他諸先輩方から色々教へをいただきました。一番印象深いのは、東・西両砺波の地区で神道青年会支部を作つたことです。林前会



長と、先ほど話にも出ました井口の井頭さんと三人で家に寄つたりしながら、さういふ「四十歳を境にした青年会みたいな集まり」

を作れんかなあといふ話しをしました。丁度高瀬神社に支部簿もありましたので、その息子さんの名前を聞き集めました。それが今でも「山桜会」といふ名前で続いております。さういふ青年神職の会が出来上がつたといふのが、入会当初の大きな成果ではないかと思ひます。梅野会長曰く「昔、富山地区でもさういふことをやつたけど、あんまり長続きせんかった」といふことでありました。この会は「難しいこと言はんと酒飲む会にしよう」といふことが長続の秘訣ではないかなあ、といふ気がしてをります。（笑）

その後、諸先輩、歴代会長の意向を受け継ぎつつ、この神道青年会の中で活動し、最終的に会長までさせていただきましたけれども、それが今日五十を過ぎて神職をやつとるがの一番のベースといふか、原点になつてをるがではないか思ひます。教へていただいたこと、勉強させていただいたことが、神社に奉仕する神主として「自分で立つ」といふことの拠り所になつてをり、神道青年会は私にとって掛け替へのない「会」でありました。見ると私たちの時代以上に活躍してをられるのが本当に素晴らしいことやと思つてゐます。

そして、会長時代に一番印象にあるのが、二年間に亘って行なった再建二十周年・創建四十周年の記念事業であります。一つには、神社神道についての講演会を、神社総代会とか関係団体などの神社界に動員をかけるがないで、一般の人を対象に行ふといふ主旨から、当時の事務局長である平尾旨明さんや副会長の二宮啓さんのお蔭で、当時の皇學館大学の学長でありました田中卓先生を講師としてお招きした事です。そして前日、先生とお話しの中で、「人数集まらないかもしれませんが公募しないで、広報だけで、普通の人がすつと入ってこれるやうな講演会を目指したい」と、こちらの思ひをお伝えしました。しかしながら当日、ボルファートの四百名収容の会場がいっぱいになるくらいの方が集まったのは本当にありがたかったです。実際には、式典もありましたので、神社の関係者百人以上集まってみましたから、一般者ばかりとはいかず、何割がさうであったかは定かでないですが、大勢集まった講演会が出来たといふことが一つです。

もう一つは、グアム・サイパンでの慰霊祭です。私は最終的にはシベリアでもやりたいと思つたんですけども…。これは青協理事としてのご経験を元に今どういふ風なことで役立ってゐるか、その辺りのことも含めてお話しをお願いいたします。

(二宮 啓) 神青会は、護國神社に奉職させていたから、入会させていただきまして、その時は先輩方が恐かったです。(笑)

(一同・笑)

(二宮 啓) 「動」の梅野先輩に、西川先輩、「静」の尾崎先輩と、タイプは違ふんですけど後輩を思って色々注意していただいたり、指導していただいたことを本当に今でも感謝致してをります。神青会に入って色んな役割をさせていただきました。広報委員長、青少年対策委員長、事務局。なんか、一番情けなかったのは、事務局時代にお金は何回計算しても合はないんですね。「なんちゅう俺って、大雑把な人間なんだらうな」と。(笑) だから神青会でさういふことを学んだこと、自分の悪い部分とか、能力の無い部分の確認…。逆に、青少年対策(委員長)の時は自分の持った能力でこなせた感じで…。もしかしたらこんな才能

特に梅野先輩の会長時代から教へていただきました東京裁判史観といふものの現代の日本に対する影響を考へたときに、我々に出ることは戦死された方々、特に海外で戦死された方々に対して、現地での神道式での慰霊祭を齋行することだと思つたのです。当時、逝く時は皆、靖國神社へ戻らう、といふ思ひで戦地に赴かれ散華されました。御霊は靖國神社へ戻ってをられませうが、グアムの遺骨の多くは、收拾出来ずそのまま残つてゐるといふことで、そこで慰霊祭を行ひたかつたのです。色々トラブルもありましたが、それだけに尚、印象深く、ありがたかつたなあと思ひます。また当時の会員一人一人の質の高さと、その努力に今も感謝いたしてをりますし、皆の氣運の盛り上がり、さういふものが無い限りは出来なかつた、と実感しました。そんな経験が、かうして高瀬神社に奉仕して、神職として「自分が立つ」といふことの良い糧になつてをるなあといふ思ひをしてをります。

大きく分ければその二つですし、もう二、三ありますけれどもそれは又、別の席で(笑)、話をするべき事ではないかと思ひます。それは別として、実際に神青会に四十歳まで

があるんじゃないかなあ…。なんて誤解した部分もありましたけれども、さういった会員時代。そして副会長を仰せつかつて、林先輩の献穀田もさつきお話しされたやうなことで凄く勉強になりましたし、斎藤さんの時のトラック諸島へ行つたときには、本当に涙が出たんですね。あれつていふのはやはり、それまで神青会をやつてきて、先輩方から色んな事をご指導いただいたからこそその涙だつたんじゃないかなあと思ひます。さういった意味で感謝いたしてをります。



丁度私が会長になつたのは、平成元年といふ、ひとつの大きな節目で、そしてまた地区理事として中央(神青協)の方に任かさせていただきました。私自身が、私当時、

林さんと同じ三十二歳だつたんです。ですから、当時の会員の皆さんには迷惑をかけた部分や、頼りきりになつた部分がすごく

一生懸命させていただいたといふことが、今の私の一番のベースに成つてあるといふことで大変ありがたいと思ひます。若い人も、これから四十までに頑張つたことが自分の人生のベースになるのではないかと、思ひますので是非頑張つていただきたいと思ひます。

(高倉) ありがたうございます。再建二十周年の記念式典から記念講演会の模様は、私も良く記憶してをりますけれども、本場に沢山の方々にお越しいただいて「すこいもんやなあ」と感激した事を覚えてゐます。(斎藤直己) あれば、ホントに神社の関係団体や神社総代会に「何人集めてくれ」とか、お願ひせんで、集まつて貰つたんだからさ。嬉しかったですね。

(高倉) それでは、斎藤先輩の後を引き継がれましたのが二宮啓先輩でございます、二宮先輩は神青協へも理事としてご出向なされて、あちらでもこちらでも活躍されました。今でもその経験を生かされて活躍してをられますけれども、二宮さんの方から印象に残つてをられること、それから神

ありました。思ひ返すとなんか、先輩方の会長時代はもつと威厳があつたなあ、もつと会員に対して色んな受け答へをして、やっぱ自分はさういふ部分の能力が無いのかなあと思つてゐました。そして、平成二年の御大典奉祝の献穀田、これは林先輩の時に献穀田をされた後、第二回目でした。うちの神社には昭和六十年に氏子青年会が発足しまして、発足の経緯については、大学を卒業後帰つてきたとき、春祭りに神輿を曳くんですが、当時、全員富山大学のアルバイト学生でした。アルバイトですからアルバイトなりの態度です、それが凄く悔しかつたんです。それで、いつかは氏子の若い人達に、一度は神輿を担いで貰ひたい、といふ思ひから氏子青年会を立ち上げました。平成二年の献穀田の時には、うちの氏子さんと長い間総代会長をやつてをられた深川さんといふ方の息子さんが、氏子青年会の会長だつたんですが、この氏子青年会メンバーの協力によつて、無事に終はりまして宮中の方に奉納させていただいて感激した訳なんです。

この氏子青年会なんです、平成十二年のときに西暦二千年記念・皇紀二六五〇年を標題にして神輿を担がうではないかと



いふことで、会の方をちよつと焚き付けまして、前夜祭の時に御旅所まで担ぎ、帰りには火渡り神事をやったんです。そして二十一年の時には、二十一世紀記念といふことで、もう一年やらうといふことで同じ事をやりました。その時に、氏子青年会の会長に、私が「どうでしたか？」と感想を聞いたんです。そしたら、ぼつんと、「いやあ、なんか、親父がやってゐたことが何となく解ってきた」といふ風に答へられたんです。ああ、これは良いことをやったな、私の思ひが少し伝はつた、もつと言へば、お父さんのやって来られたことが感じてもらへたんだなあ、といふ風に僕も感じました。そして、神輿担ぎを毎年やらう、といふ話しが、担いだ会員から挙がつたんです。その時、僕はすごく嬉しかったんです。その話し合ひで私はオプザーバーのやうな形で、決して強制せずにおりました。どんな風に？とか、僕から強制したわけでは無いんです。「毎年やらんまいけよ、お金いくらかかるがけ？」「神社の予算はこんだけしか出んから…」「それなら僕らで少し集めてなんとかするちゃ。」といふことで今年から毎年やることになりました。さういふことこの素地は、氏子青年会で献穀田のお

田植系神事をやって、伝はつたのではないかと感謝してをります。

神道青年会の組織のひとつの役割っていふか、肝って何かといふと、僕はやはり奉仕であり、修練であり、友情であり、社会教化ではないかなあと思ひます。現役の時にいろんな経験をして、それを今の日本の社会に広めて行くことが、私は神道青年会の役割ではないかと。今の日本は、代々伝はってきたことが伝はつてゐない時代なんです。ですからこの神社界、神道青年会といふものは歴代の先輩方が、いろんな事をやってこられて、いろんな事を教へられ、それをずっと引き継いでゐるぢやないですか。その良い部分を身の周りの社会に教へなければいけないのではないかなあ。自分たちのやってゐることを自分たちの世界だけではなく、他の方にも広めて行かなければいけないぢやないかなあと思ひます。例へば先ほど「日の丸パレード」を尾崎先輩と榎野先輩がされたといふ話でした。現在途絶えてますけど、今の世の中、何でも本音で語って行けば受け入れられる時代ではないかと思ふんです。もし良かったら復活させてみてはどうか、等々、いろいろと周りの状況を考へて、これから神道

てをりまして、色々ご配慮していただけるといふことで、かういった人間関係、昔のことが今にまで来てゐるんだなあと思つて感謝をいたしてをります。また、斎藤さんの時代には、神青会主催のトラック島とグアムでの海外慰霊祭を斎行致しました。この時は事務局としてお手伝ひをさせていただきましたけれども、自分が会長になりましてからもオーストラリアで慰霊祭をさせていたいただきました。戦争中、本当に自分等よりもまだまだ若い人達が外地に赴かれて、日本を守るためにご苦労をされたといふことを、さういった機会で実感することができました。私ども戦後に生まれた者として、英霊顕彰のためにこれからも海外慰霊祭を続けて行くべきであると感じました。今も正直言ひまして自分が関係してゐます団体の主催で、海外の慰霊祭をしてをります。まあ、このあとどうなっていくかは判りませんが、かういった戦後五十年といふひとつの節目が終りましたけれども、また続けて行くことができなあと思つてをります。そして現在自分が神社庁教化委員会の委員長をさせていただいてをりますが、この教化委員会に於きましても、本当に中心になって動いてお手伝ひをしていただい

青年会の皆さんに活躍していただきたいと思ひます。以上です。

(高倉) ありがたうございました。やはり現役時代の経験を生かされて今でも氏子青年会の教化といふことで非常に活躍されてられるやうでございます。私の活動方針のひとつでもありますけれども、研修するにしても内輪だけの研修に終はるんではなくて、我々が培つてきた事を広く氏子の皆さん方に広めて教化に繋げて行くことが青年神職としての大きな役割だと思つてをりますので、お言葉を肝に銘じてこれからの活動に役立てて行きたいと考へてをります。それから二宮先輩の後を受けられましたのが平尾旨明先輩でございます。当時行はれた再建二十五周年・創建四十五周年記念行事の事も含めて宜しくお願ひいたします。

(平尾旨明) それこそ先輩方に色々教へていただいたことを感謝申し上げます。私が神道青年会に入ったときは尾崎会長さんの時代でありました。はじめに神青会の総会に：とまあ、あの当時、役員会と総会と引き続いてやってをられまして、多分役員

以外で総会に出てをったのは私一人でなかったかなあと思つてをります。まあ本当に今から二十何年前かになつてしまいますけれども懐かしく思つてをります。会員になりまして特に自分の中で一番思ひ出に残つてをる



事、林 芳光会長さん、そして斎藤直己会長さんの時代に事務局二期四年をさせていただいたことです。両先輩とも大変厳しい方では有りましたけれどもまた、優しく私を指導していただいて、今現在神主としてあるのも、この神道青年会といふ組織で自分を鍛へていただいたお蔭でないかと、歴代の先輩方として両会長に感謝をしてをるわけでございます。先ほど林さんからも話がありました通り、献穀田を斎行し、その初穂を宮中に奉納することについては、鈴木瑞磨さんの同級生で宮内庁の掌典職の方にお世話をいただき、実現することができたわけです。現在でもその時の縁が続い

てをるのが神青会のOB、また現役の会員の方々がほとんどではないかと思つてをります。これからの神社界は益々厳しい時代を迎へるかと思ひますが、現役、OBを含めて結束をして事に当たつていただきたいなあと思ひます。どうかこれからも宜しくお願ひいたします。

(高倉) ありがたうございました。

神青会は、何かありますと常に別表神社様にお世話になつてをりますし、特に日枝神社さんにはしょっちゅう会場をお借りいたしてをりますことをあらためてこの場をお借り致して感謝申し上げます。今後とも宜しくお願ひいたします。

平尾宮司さんの後、会長を受けられましたのが佐伯勉先輩でございますが、本日出席の予定でしたが、どうしてもはずせない急用が出来たといふことで残念ながら欠席されました。後日、文書をいただいて会報集の方に載せたいと考へてをります。平成五年から会長を務めの佐伯勉先輩の時には阪神淡路大震災がありまして、その復興支援活動を会員挙げて参加した思ひ出があります。

続きまして第十一代、平尾晃先輩が引き

受けて会長をお務めになりました。この平尾晃先輩の頃になりますと今現役の会員のほとんどが一緒に活動をしてをつたやうな状態でございます。思ひ出話をすれば我々も非常に話しが尽きないところでございますけれども、特に印象に残ってる事、それから、ご卒業後、外から見られて今の神青会に対してお気づきの点などございましたら一言お願いいたします。

(平尾 晃) 今日はこちらの席を作っていただきまして本当にありがたく、昔といひますか、この会を卒業してそんなに経っていませんけれども懐かしく思っています。また、こちらの大先輩方の活動の本当に苦勞話など色々お聞かせいただきまして、その中に参加をさせていただいたこともございまして懐かしく当時を思ひ出してをります。

私が富山に帰って参りました日枝神社に奉職しましたのが昭和の五十六年の四月でございます。当時神青会は梅野先輩が会長をお務めでした。初めての神青会の活動に参加させていただいたのが、天皇誕生日の前日に行つてをられました日の丸パレードでございます。場所は射水神社を中心



やったわけでありませぬ、それなりに大成功でなかつたかなあといふ思ひがあります。その後も庭燎の集ひが今まで続いてをり、また年々緻密に色んな事をそれに盛り込んで立派な青少年育成に役立つ行事になってゐることに感慨深いものを感じてをります。

神青会に早くに入ったせいもあるんですけど、二十年間どっぷり浸かってをりますと思ひ出を話せば尽きない、本当にひとつひとつが出てくるわけですが、その中で自分が会長に選んでいただいたのが平成六年の臨時総会でありました。これに併せて第一回目の寒中の禊祿成会もこれから始まったと思つてをります。それも最初先輩方から「真冬の海に入って心臓止まつたりして、何かあつたらどうすんかい」と脅かされたりしましたが、第一回はそんなに寒い日でもなく、ちよつと雪がちらつ

集まりまして高岡市内を巡回した記憶があります。当時、まだ私は車の免許を持つてをりませんが、今はもう帰幽されましたけれども平尾旨治さんが日枝神社のライトバン、広報車を運転されて一緒に横に乗せていただきました。日丸を振つた記憶があります。当時私は二十歳でございました。先輩方とは大きく年の差が開いてをりまして、親以上に先輩に、(一同・笑)感じまして、同じ青年会つていふ感じぢや無かつたです。(一同・爆笑)

本当に親子くらゐに感じてをつたやうな記憶があります、す



いませぬ。(笑) その当時、斎藤さんも一緒に帰つてこられて初めての参加でしたが、「年は離れとるけれども、富山の神青は同期だから」と斎藤さんにそうおっしゃつていただいたことが随分印象に残つてをります。

林先輩が会長の時代は、平尾旨明先輩が

てゐるぐらいで、無事に禊祿を行へた事が思ひ出になつてをります。丁度、会長職を佐伯勉先輩から受け継いだこの年、先ほど高倉会長からも話しがありましたけれども阪神淡路の大震災があつた年でありました。またオウムのサリン事件があつたりと、本当に世の中暗いニュースがいっぱいあつた年であり、自分のスタートは暗いスタートであつた記憶があります。震災直後、神青協主催の救援活動として、夜中、車に色々機材を積んで森田建設さんからワンボックスをお借りし、その屋根に一輪車を沢山積んで黄色いヘルメットと鶴嘴やシャベルを持つて神戸市内の網敷天満神社へ支援活動に赴きました。震災の悲惨な状況を目の当たりにして、言葉を飲んだことを記憶してをります。

そして僕ら若い者が神明奉仕以外にもボランティアなどで社会に協力できることはないであらうか、と考へてゐたところ、神戸では震災から一年経ち、大方の復興が終つたといふもの、まだまだ一人暮らしのお年寄りの方とか困つてをられることをニュースで知りまして、何かお手伝ひできないだらうかと考へてをりました。そこへ当時事務局次長を務めてくれてをりまし

事務局長を受けられました、私は事務局次長といふことで事務局のお手伝いをさせていただきますました。林先輩時代に始められた「二六会」と「庭燎の集ひ」には特に思ひ出を持つてをります。

一六会については、それまで会員が集まる機会が無かつたものですから、毎月どこか会員を集めて何かやれば良いのではないかといふ趣旨ではじめたと記憶してをりますが、これもまた思ふやうに参加人数が増えず、平尾先輩や当番の会員の方と、どうすれば参加者が増えるだらうかと、色々悩んだことを覚えてをります。そして一六会が始まつて三年目だつたでせうか、その年の一六会に十二ヶ月間休まず出席したといふことで、総会の締めに一六会の皆勤賞を貰つた記憶があります。なんか、ボールペン一本だつたんですが、(一同・笑)嬉しかったですね。なんか、さういふことも自分の励みになつたりしてをりました。

また庭燎の集ひについては、私が青少年対策の担当でありましたが、なにぶんにも初めての開催で、何をどういふ風にやればいいのか、皆目検討もつかない状態でありました。林先輩が色々情報を集められて書類を作られ、それを聞き、とにかく一生懸命

た上田君が、現地で支援活動をしてゐるボランティア団体が若者の助勢を求めてゐることを調べてきてくれました、早速その団体が活動してゐる神戸へ行くことにしまして、結局神青会として、六回ほど神戸へ行ってボランティア活動をして参りました。私はその内二回しか行けなかつたのですが、本当に一人暮らしで困つてをられるお年寄りの介護のやうなことをしたりと、白衣を着た活動以外にも有意義な活動ができたやうな気がします。やはり同じやうに福井県沖での重油流出事故があつたときも、全国の神青会の中にもいくつかがボランティア活動でやつてをられた所もありましたけれども、神戸での経験を生かした富山の神青会が、いち早く救援活動を実施することができたやうな気がします。

私が会長時代の強く印象に残つてゐることのひとつに白山登拝があります。神青会として立山登拝をしたことはありませんが、白山はまだ登拝してをりませんでしたので、これを実現しようといふことになりました。白山は立山よりも低い山だと、高をくつてをりましたら、これがどうしてどうして大変でありまして、本当に一日がかりで登つて、下山途中では膝ががさしくなり、も

う大変な登壇となりました。一緒に登壇した会員のみなさんには大変迷惑を掛けて申し訳なかったなあと思っています。

そんなこんなで会長を退いた後、丁度北陸の地区理事が当番で廻ってきました、会長職が終はった私に「やってみるか」といふことでご指名をいただきまして、その後二年間地区理事として神青協へ出向させていただきました。この出向は自分にとって色々と勉強になりました。まあ、それまでも中央と地方の神青の間には随分と距離があるなど感じてをったのですが、やはり中央へ出てみますと、中央の考へ方や思ひなどは、地方の感覚と大きなズレがあると感じました。このズレを修復するためにも、まづ北陸四県が纏まることからはじめようと色々努力したことを覚えてをります。この時くらいから北陸四県が結構良く集まるやうになりました。またこの年は神青協が五十周年を迎える時でもありました。その折には神青協が記念事業を色々行ったわけですけれども諸先輩方には本当に過分なご協賛をいただきまして、本当にありがとうございました。

そんなことで本当に二十年間お世話になったと思つてをります。まあ本当にその中

ました。丁度キャラバン隊が来てをりました。「天皇陛下」といふビデオを上映してゐるから見に行かう、といふのが最初の活動参加でありました。このビデオを見る以前は、私も勿論、戦後の生まれで戦後の教育を受けてをりまして、陛下の大御心や、まして色んな御公務とか大変疎かったわけです。ところがこのビデオを見ましたら大変な感銘を受けまして。昭和天皇様の大御心に触れたと申しますか、で、ですね、「すぐ買ふ！」と。ビデオデッキも持たぬのにこのビデオを「すぐ買ふ！」と。(一同・笑) そんな感じで(笑)。このビデオを契機としまして、それ以来例へば渡部昇一さんなどの本を多く読むやうになりました。

そして私が会長を務めてをりました時に神青会設立五十周年の記念式典を催したのですが、これに併せて記念講演会もやらうといふことになりました。ちゃうどその頃、ふと本屋に寄りますと渡部昇一さんの「日本人の本能」といふ本が出てをりまして、「これやつ」と。読んで、また「よし、これで行かう」といふことで、お金もかかったんですが、是非聞きたいといふことで、記念講演の講師を渡部昇一さんにお願ひし、

で得たものといふのは数知れません。さういった会で先輩方から受け継いできたものが自分なりにまた今の世代の方に受け継がれたやうな気がしてをります。それがそれぞれ受け継いだものを一生懸命切磋琢磨してよりいいものにして伝はっていつてゐるやうに思ひます。これからももっと太く、素晴らしい会の活動を続けて行つて貰ひたいと思ひます。

(高倉) やはり二十年間の思ひ出は語り出せばきりがないうやうで、こちらの段取りが狂ふほどお話しいただきました。(笑)

大分予定の時間も迫つて参りました。続いて前々会長の武田さんから、お話しを宜しくお願ひいたします。

(武田邦造) 時間が押してをりますので簡単に申し上げたいと思ひます。皆さんは國學院大學を出られた社の方々ばかりですが、私は本当は畑違ひの人間でありまして、ましてや、まさか会長になるなんて想像もつかないことであります。

初めて神青会に参加いたしましたのは、護國神社で開催されました総会でした。当時梅野先輩が退会され、林会長さんが就任

実現したわけでございます。その折には、皆さん方、別表、神社庁、支部の方々にご協力いただきました。お蔭さまで大盛會に終はったことを記憶してをります。

また私の会長時には、献穀田もいたしました。私の兼務社一社しかありませんで有山という処で二十四軒ほどの氏子なんです。が、村民ごぞつてご協力をいただきました。「早乙女」をお願ひしたわけではございませんが、昔は：お姉さん？みたいな方々に、(笑) 一生懸命やつていただきました。

(一同・笑) 本当に楽しく田植会、稲刈りをさせていただきました。

また、五十周年の記念事業として慰霊祭とかも考へたんですが、今回は少し視野を変へて、見聞を広める意味でローマとパリへの視察研修を行いました。バチカンの修道士さんとの交流会は大変有意義なものでした。また町の雰囲気なり教会なり、牧師さんの話など本当に勉強になった事を覚えてをります。実際行つて肌で感じるといふことが大事であつたかと思ひます。

さて神青会を離れてから、「もつとかういふ風にすれば良かったかなあ」と思ふ点は多々ありますが、現役の皆さんには、尖兵として、話しをするよりも先づ行動を起

された時であります。

その総会でお二人のご挨拶が大変立派なものであります。そして、ちょっと場違いなところへ来てしまつたかなと感じたことを覚えてをります。その後に飲み会がありまして、そっちの方だけはちょっと得意と、(一同・笑) してをったんですけれども、それで少し安心を…。

もう十七、八年くらゐこの神青会に参加させていただいたわけですが、神青会は本当に自己研鑽の場であつた、その一言に尽きると思ひます。

お隣にをられます平尾旨明先輩に手を引かれてといひますか、「どうだ、はいつてみんな」と誘はれましたのが入会のきっかけでありました。その年は昭和六十年で、昭和天皇様御在位六十年の佳節の年であり

こしていただきたいと思ひます。そして伊勢の神宮崇敬会、明治神宮の崇敬会、靖國神社の崇敬奉賛会、せめてこの三社の崇敬会には入つていただきたい。さらに産経新聞と月刊正論を購読していただきたい。ある大社の権宮司さんあたりも「これからも色んなマスコミに流されず、月刊正論を購読しよう」といふことを言つてをられます。実際に私も購読し、それぞれの崇敬会員であります。が、さういったこともやつて行かなければならないと思ひます。

また国旗掲揚の啓発運動ですけれども、私も個人的に神社で無料頒布を行つてをります。去年ゴールデンウィーク前に三十本を社頭に置いておきましたら、一週間も経たずに無くなりましたし、今年の正月におきましても三十本が一時間ぐらゐで無くなりました。

様々な教化活動を行ふにあつては、まづ自分自身が勉強し、そして自分でできることから行動に移して行くといった事が肝要であると思ひます。これからの現役会員の活躍を期待してをります。

(高倉) ありがたうございました。大変(時間) 押してをりますが、もうお一方にな



りました。前会長河合さん、お願いいたします。

(河合正登) 予想通りの展開でございます。

(一同・笑)

(河合正登) 本日の参考資料として、事前に配っていた資料では、平成十一年二月のグアム・トラック島慰霊巡拝までが記載されていますが、私はこの後四月から会長として登場しますので、この資料の中に載っていない、本当にOBになりました。



尾崎先輩のご息が、今あそこでカメラを構へてるんですが、私の俸が順調に成長して神青会に入れてもらへたら、まだ現役の会員でをる年代でありますので

(一同・笑) 本場にさういふ意味でも神青会は、次世代への継承の場、といふやうな感じがいたしてをります。

私の親父はもちろん宮司ですが、他に県職員といふことで仕事を持つてをり、母も教職にありましたので、武田さんも言はれましたが私自身も、子供の頃はあんまり「神主」といふ環境を本場に意識することなく育ちました。小学生くらゐから正月だけ兼務社のひとつで朝方まで太鼓を叩く、といふのが年にいっぺん神主の仕事である、といった感じであります。大学も神職過程の無いところへ行きましたので、専攻科に入る際に推薦状をいただきに、平尾前庁長様にお会ひしたのが、私にとりまして正式に神主さんと出会ふと言ひますか、正式に對外的に出会った他の神主さんでありました。専攻科に入つて一年間、随分鍛へて貰ひました。そして神奈川のお宮に五年半奉職し、富山に帰つてきた時には、もう平成になつてをりました。神奈川のお宮では、県の神青会に向する役員が決められてをりましたから、私が参加したのは、新人の二年間の大寒禊だけでした。これは大寒の夜と朝に江ノ島の海に入つて禊をするのですが、神青会といふのは何とすごいことをや

つとる、といふ印象が残つてをります。で、帰るときに先輩から紹介状みたいな手紙を書いて貰ひました。「富山へ帰つたら二宮君がをる。ちゃんと挨拶に行け。この手紙を持つて行け。」さう言はれて二宮啓さんの所へご挨拶にうかがひ、そしてお話しを聞いていただきました。すると「さうか、わかつた、よう帰つてきた、さあ、飲みに行かうか。」(笑) そんなときに私、車で行つたこと本当に後悔いたしました。それから神道青年会に参加いたしました。隣の平尾さんは二十年間、私は十年間でしたけれども本当に三十代の青春を共に歩いたと、そんな思ひです。この続きは二次会でといふことで。(笑)

(一同拍手)

(高倉政憲) 本場に申し訳ございません。おひとりずつまだまだおっしゃりたいこともあつたかと思ひますが、また懇親会の場でゆっくりとお話しをうかがひたいと思ひます。長時間に亘りどうもありがとうございました。



懇親会 於 富山第一ホテル内 松川



### 歴代会長任期

- 再建初代会長 鈴木瑞治  
 (昭和四十二年七月～昭和四十六年七月)  
 第二代 田代昭夫  
 (昭和四十六年七月～昭和四十八年七月)  
 第三代 水見淳夫  
 (昭和四十八年七月～昭和五十二年八月)  
 第四代 尾崎定輝  
 (昭和五十二年八月～昭和五十四年七月)  
 第五代 梅野守雄  
 (昭和五十四年七月～昭和六十年三月)  
 第六代 林芳光  
 (昭和六十年三月～昭和六十二年三月)  
 第七代 斎藤直己  
 (昭和六十二年三月～平成元年三月)  
 第八代 二宮啓  
 (平成元年三月～平成三年三月)  
 第九代 平尾旨明  
 (平成三年三月～平成五年三月)  
 第十代 佐伯勉  
 (平成五年三月～平成七年三月)  
 第十一代 平尾晃  
 (平成七年四月～平成九年三月)  
 第十二代 武田邦浩  
 (平成九年四月～平成十一年三月)  
 第十三代 河合正登  
 (平成十一年四月～平成十三年三月)  
 第十四代 高倉政憲  
 (平成十三年四月～)

### 座談会を終へて

○座談会終了後、諸先輩方より座談会を終へた感想と次世代の神青会員への激励をいただきました。

- ①座談会を終へての感想を一言お願いいたします。  
 ②神青会を卒業された後の人生に於いて、卒業してみてあらためて気づいたことや、見えた事柄などありますか？  
 ③次世代の青年神職に激励の言葉をお願いいたします。

#### 再建初代会長 鈴木瑞治

- ①このたびのお招きにより再建当時を思ひ起こすことが出来、また歴代会長から現在の素晴らしい神青会となるまでの過程を聞かせていただき、再建の甲斐があったことを大変嬉しく思ひますとともに歴代会員の皆様のご努力に深く感謝いたします。  
 ②県神青会また全国神青協と知り合った諸氏と現在も交流が続いてゐることは大変ありがたいことと思つてゐる。また、今回の座談会で若い皆様と交流、話し合ふことが出来た事を嬉しく思つてゐます。  
 ③次世代を担ふ神職の皆様にお願ひしたいこと。  
 一、皇室を正しく理解し、氏子、崇敬者

に伝えること。

- 二、神社実務に精励すること。  
 三、明治維新前後に活躍した郷土の神職の中に五十三歳になってゐるが神道の将来に思ひを致しながら師を求めて上京して勉学につとめ、やがて帰郷して私塾を開いて多くの人々に神ながらの道を説いた先輩がある。私達神職すべてが生涯勉学の気概を持って神勤めに励みたいものと思ふ。

#### 第二代 田代昭夫

- ①「富山神青のあゆみ」(昭和五十三年)の一文に、会長時代を「五里霧中ながら血気盛ん、神青会は心のよりどころであった」と述べたことがあったが、まさにその通りで、当時が懐かしく、この座談会の企画が当を得たことが喜ばしかった。  
 ②神青会を通じての同志との友情の数々を深く感謝せずには居れないし、また任期終了時の昭和四十八年に、第六十回神宮式年遷宮宮掌補を命ぜられ、奉仕させていただいたのは生涯の感激であり、大変な光栄であった。  
 ③いよいよ充実した現在の神青会の諸活動には敬服する他はない。その若いエネルギーをいつまでも持ち続けて欲しいものである。

#### 第四代 尾崎定輝

- ①現在の会長さんが第十四代目と聞き、長い歴史を継続されてきた事に感銘を深くいたしました。歴代会長さんが、その時代の難題を苦勞を重ねて乗り越えて来たことに敬意を表します。私は創建当時から関わり、会長時代はもとより、事務局時代の楽しかったこと、苦しかったことなどが彷彿としてまゐりました。  
 ②その当時、苦樂を共にしてきた先輩、後輩は何でも言ひ合へる友達であります。今後とも斯界のため、貢献できるやうに努力をいたしたい。生きてきた証を後世に残して行きたいと思ひます。  
 ③継続は力です。益々のご発展を祈ります。

#### 第五代 梅野守雄

- ①その時代その時代に若い神主が、各々頑張つてやつて来てゐることを実感し、感慨無量でした。  
 ②私自身神青の時と余り変わらず感動を以て奉仕をつづけてゐるつもりです。ですから皆様と同じ雰囲気の中に浸つてをり卒業した思ひはありません。  
 ③もつともつと子供のやうな純粋な氣持ちで熱く語り合つて神社運営の原動力になるやうな會をつくり、眞の青年神主になつて下さることを望みます。

#### 第六代 林芳光

- ①各々のお立場でご努力された事をお聞きし、あらためて懐かしく思ひ感銘を受けました。  
 ②神青会を卒業してまだ十年、當時と変はらない氣持でゐると思ひます。これからも見識を高め、神主としての資質を磨き、社会の師表となるやう努めて行きたいです。  
 ③青年神主として、今何ができるか、何をなすべきかを常に考へ、勇氣と行動力をもつて躍動していただくやう念願します。

#### 第七代 斎藤直己

- ①久しぶりに先輩、同輩諸氏の顔を一同に拝見し、会員当時を思ひ出され大変に懐かしかった。又、忘れてゐた当時の思ひが蘇り、心新たな氣持ちにさせられました。  
 ②若さの勢ひ、力、団結の大切さといふものを痛感してをります。会員時代に学んだ事が、現在の自分の基礎を作つてゐると感じてをります。  
 ③一人一人の思ひの結果を計り、将来の自分を作つていただき、會が益々発展されますやう、祈つてゐます。その上で新興宗教にはしる人々の想ひにも一考いただければと思ひます。

#### 第八代 二宮啓

- ①久しぶりに楽しい一日を過ごさせていた

いただきました。

- ②与へられた仕事を一生懸命やること。  
 ③とても頑張つて活動を行つてゐると思ふ。過去の事業や引き継いできてゐる事業が何故行はれたのか、その心を継続すること。

#### 第九代 平尾旨明

- ①会長を中心に、皆さん協力しあつて活発に活動を行つてをられるのがよかったです。  
 ②神青会員時代に活動を通じて、多くの事を学ばせていただきましたし、現在の自分があるのは、神青会のお蔭と感謝いたしてをります。「皆さんありがとうございました！」  
 ③神社界をめぐる環境は益々厳しさを増すと考へられますが、会員相互に協力して諸問題に取り組んで行つて下さい。

#### 第十代 佐伯勉 (当日欠席)

- 神青会時代で一番印象に残つてゐることは何ですか？  
 平成七年三月七日～八日、阪神淡路大震災被災神社復興支援で神戸市網敷天満神社で支援活動を行ったこと。  
 ②二十歳代、三十歳代でできないこと、また思ひつかないことが多々ある。いつも新鮮な心、好奇心旺盛な氣持ちを持ち続けること、これが難しい。これで良いのか、このままで良いのかいつも自分自身に問

ひかける習慣を身につけておくべきである。  
③自分たち青年神職がやらなければ誰がやるんだといふ気概をもって時局問題に立ち向かって下さい。

#### 第十一代 平尾 晃

①座談会では神青会の思ひ出がありすぎて、何を話したらよいか分からなくなり、かなり時間を延長して皆さんにご迷惑をかけて申し訳ありませんでした。

②会長・地区理事職終了後の二年間は会員でありながら半分OBのやうな気持ちで過ごしたこと、当時の河合会長を始め執行部の皆さんには申し訳なかったと思っております。

③・神青会で活躍された先輩方が現神道界で中心となり活動されてゐます。自分も続きたいと思つてゐますし、この基礎は神青会時代に築かれたと思ひます。  
・成功、失敗を考へすぎず、まづ行動。  
・それとあまり会の活動に没頭しすぎて家庭をおろそかにしないこと。

#### 第十二代 武田 邦浩

①すごく充実した顧問との懇親会だったやうな気がいたしました。

②・先づもつて私のやうな会長に会員の皆さんがついて来ていただいた事に感謝申し上げます。

#### 富山県神道青年会

会長 鈴木 瑞治

会員 五〇名

事務所 富山市山王町 日枝神社内

富山県神青会の歩みを回顧するとき、その回顧の時期を大きく二つに分けねばなるまい。すなはち、それは大東亜戦争終結の翌々年、敗戦によるG・H・Qの神道指令などのため、禁圧された時局に対処すべく、たまたま県内の青年神職有志らが富山県神社庁の一室に相集ひ、激変する社会の現実に神道人としての重責を痛感し、本会の母胎を作った吉川正文氏（現神社本庁講師）ら諸先輩の貴い活動がある。つぎに鈴木瑞治会長ほか、現執行部が本会の性格を再確認し、体質の改善と前進のため、中央との連絡を取りつつ県内の若手グループに呼びかけ、働き続けたここ数年の諸活動である。

まづ本県神青会活動の揺籃期とでもいふべき昭和二十年代初頭を回顧すれば、

・兼職されてゐる会員の方とのコミュニケーションをケーションをも取ればと思ひました。  
③大きな事は言へませんが存在感のある会員として何事にも行動して行つていただきたいと思ひます。

#### 第十三代 河合 正 登

①ついこの前まで会員だった自分にとっては、この座談会ではまだまだ企画運営側のやうな気持ちであった。多くの先輩諸兄の貴重な体験談をうかがひ、人生観を垣間見る素晴らしい機会であった。富山神青の長い歴史の一頁に自分も参加し、その空気を胸一杯に吸ひ込んでゐたことを実感した。そのことをこれからの神明奉仕に如何に活かして行くかが課題である。

②卒業すると気が抜けたやうになるかとも思つたが、引き続き、教化委員会など多くの事業、活動に参加させていただいてゐる。「一休み」などあり得ないことに改めて気付いた。

これから何が見えるかは：未だ見えない。

③神青の諸活動から何が得られるかを考へるのではなく、如何に自身が積極的に係はり、全国の同士と時間を共有したかが大切である。神青会員によつて生み出される若さの爆発力に対しては、大げさでなく、無限の可能性を感じる。僅かの期間であるが退会後の一年間、外側から眺めてみてその

実に神青協（全国）発足より先だつこと二年、昭和二十二年に遡る。同年二月下旬新川郡魚津町の神明社にその設立発会式が開かれ、集まつた青年神職は佐伯静夫、山内正雄氏ら二十名を数へ、会長吉川正文、顧問に綿貫栄、上田正登世の各氏が役員に選び今後の方針を決めたが、会員は四十名を連ねた。また会則も制定され、ちなみに第三条（目的）には「本会は神社の宗教的在り方並に宗教家としての進むべき道を探求すると共に相互に激励しつつ斯界推進力たるを期す」、第四条（事業）に「一、神道に関する研究、（一）祭祀祭礼の研究（二）神社経営の研究（三）神社宗教の啓蒙運動。三、研究紀要の発行、等。」とある。なほ機関紙「可加美」（年四回）も当初はかなり順調に発行せられた。また第一回の討論議題は「神道における民主主義受容の仕方について」、第二回は「神道と仏教の提携の仕方について」などである。

思ひは一層深まった。富山神青 弥栄！

研修会場は呉東呉西交互に当番とし、昭和二十三年の例では、二月下旬新川郡生地町高倉盛孝氏宅や三月に東砺波郡般若村黒田立雄氏宅などが当てられ、「神社神道の在り方」や「天皇と神社」などが論題となった。「可加美」には会員の活発な意見が寄せられ、また吉川正文、木船覚童氏らは長論文を寄稿した。かうした地道ながらも各県の研修グループはやがて神社本庁などを動かし、昭和二十四年六月全国十七団体の代表を集め、神道青年全国協議会第一回総会が開かれるに至る。以降二十回総会まで本県より近尾昌孝、平尾旨剛、林直樹、高松正治、二宮清孝、二宮正篤、横越昭二、二宮正守、鈴木瑞治、西宮貞之、田代昭夫、船木信光氏らを派遣した。

昭和二十七年九月、金沢市尾山神社における神道青年北陸地区協議会の設立により北陸ブロックの連繋が行はれ、その後県外での総会または研修会に現在まで宮木康政、九里毅一、川人貞現、二宮正

篤、二宮正守、横越昭二、篠原弘、宮崎寛之、氷見淳夫、山田方輝氏らが参加、研修と連絡に当った。

なほ北陸四県の当番県として、昭和二十九年八月、雄山神社に佐古幸嬰、石井寿夫講師を招き約二十五名が研修に参加、三十三年七月には神社庁並びに雄山神社にて鉄砲州稻荷神社中川正光宮司、県社会教育課五十嵐精一主事を迎へ約三十名参加。三十八年十月神社庁並びに千寿ヶ原にて十二名、そして四十三年八月には県護国神社に三十四名が参集、吉川正文、九里道守講師を迎へたが、いづれも青年神職の果すべき役割を自覚し、運動方針の協議や神道理論の学習あるいは祭式の講習などかなりの成果をあげた。

会長は吉川正文氏からやがて二宮正篤氏に引継がれた。かうした先輩各位十数年の活動のうちに、構成する会員の交代も行はれ、また新しい世代の台頭めざましく、やがて神青会活動は現会員らによって再確認され、再建期に至るのである。

昭和四十二年七月、魚津市の魚津神社

にて奇しくも創立二十周年式典たるべきが、再建の総会として開催され、新しい役員陣営、修正された会則で力強く再出発を誓ふこととなった。特に近尾昌孝、

九里毅一、高松正治、横越昭二氏らの諸先輩の激励と指導を仰ぎ、今後の運動方針に会活動の再出発、明治維新百年祭と式年遷宮の対策などの支柱を立てた。社会情勢は二十年の間に重大なることさして変らず、われわれは富山市日技神社に事務局を設け、会の運営や中央との連絡などは尾崎定輝氏が担当し、総力の結集を申合せてゐる。式年遷宮奉賛活動にしても先輩の実蹟にめげず、林耕之氏（現神社庁長）より二十年前の街頭募金の大職を示され、いやが上にも意気軒昂、強力な自覚のもとに相互の研修と親睦を計つてゐる。

なほ現会員数五十名。執行部は会長鈴木瑞治氏ほか船木信光、高倉恭憲、高邑吉房、田代昭夫、氷見淳夫、尾崎定輝の

諸氏が当つてゐる。

（以上は昭和五十三年十二月十六日発刊「―再建十周年記念誌―富山神青のあゆみ」からの転載である。）